



・特集・

環境と皮膚(光線も含む)

編集担当 馬場 直子

今回は、日常の生活環境の中から皮膚が受ける、さまざまな有害事象としての皮膚疾患を取り上げてみた。環境の中の有害事象は日光をはじめ、大気や土壌、海水、動物、昆虫、細菌、微生物など、非常に多岐にわたる。こうして集めてみるとわれわれの身の周りのあらゆるところに皮膚に障害を与えるものが潜んでいて、その原因や病態を一つ一つ丁寧に紐解き解決していくことのむずかしさと面白さを知りえた。

まず「Topics」では、幼児期に発症した日光蕁麻疹の姉妹例を供覧しながら、どのようにして日光蕁麻疹を疑い検査していくべきかを解説していただき、光線が関与する皮膚疾患の分類と鑑別点をまとめていただいたことは非常に勉強になった。「研究」では、浸潤性有棘細胞癌に進展しやすい日光角化症の病理組織学的高リスク所見を4つあげられ、AKの病理組織をみるときにどこに注目すれば将来SCCに進展しやすいと考えるべきかが明確となった。さらに、切除する際にマージンをどのくらい取るべきかなどは、より適切な治療方針を立てることにつながり、極めて有用であると思われた。

PVL陽性MRSAによる癰腫症は、近年国内でも増加しており、家族内感染や集団感染するとなかなか収束できないことが問題となっている。典型例と治療のポイントがよくわかる症例報告があるのでぜひご一読いただきたい。ジカ熱の症例では、同じく輸入感染症のデング熱、チクングニア熱などとの鑑別点を表に示してあるため、早期に診断してとくに妊婦などへの二次感染を防ぐためにもぜひ参考にしていきたい。巨大な有棘細胞癌を発症した色素性乾皮症C群の報告には、たいへん衝撃を受けた。光線過敏症状がない色素異常型XPの場合、診断と遮光指導の開始が遅れてしまううえ、発癌リスクが高いため、われわれ皮膚科医の責任は重大だと痛感した。

その他にも井戸水の摂取歴のある母娘に生じた多発BCCや、眼球の運動障害を生じたマムシ咬症、非典型的皮疹のツツガムシ病、近年流行地域を拡大しつつある日本紅斑熱、pork-cat syndromeと他の獣肉アレルギーとの鑑別、免疫不全患者に生じた*Mycobacterium marinum*感染症の治療に長期間を要した例など、日常診療で遭遇することは珍しいが、どのような臨床像をみたときに疑い、診断をどう進めていくべきかわかる内容となっている。

最後に、このコロナ禍の中、妖怪アマビエ信仰が脚光を浴びているが、皮膚科医学史にご造詣が深い岡田先生に執筆いただいた、そのいわれと温熱性紅斑に関わる来訪神の伝承についてもぜひご一読いただきたい。